村山民俗学会

第 419 号
発 行 日　2026 年 9 月 1 日
発行責任者　相原　一士
編 集 担 当　岩鼻 通明

五百沢智也先生の思い出

岩鼻 通明

「村山民俗」４０号の拙稿で、五百沢智也先生が蔵王県境裁判で、地形図の読図方法を伝授していただいたことに触れた。そこで、五百沢先生の業績と人となりを振り返ることにしたい。

先生は 1933 年に山形市で生まれ、旧制山形中学に入学、新制山形東高校を卒業後に、1957 年に東京教育大学地理学科を卒業され、建設省地理調査所（現在の国土交通省国土地理院）に入所され、地図づくりと空中写真による積雪調査の開発研究にあたられた。ところが、ヒマラヤ調査の目的で長期休暇を申請されたところ、許可が降りなかったことから、1970 年に辞職して、フリーとなられた。

私が五百沢先生のご著書に最初に接したのは『登山者のための地形図読本』であった。本書は 1967 年に山と溪谷社から刊行され、新版が 1972 年に出版されている。この年は私が大学に入学した年であり、大学 2 年生あたりから、毎月「山と溪谷」誌を愛読していた。たぶん、この月刊誌に広告が出ていたのではなかろうか。その頃すでに文学部史学科地理学専攻への進学を決めていた。それもあって、たいへん興味深く読んだ記憶が残る。当時は、まだ旧版地形図が登山に使われていた時代で、谷がひとつ少なく描かれていたことが遭難につながったとする記述があったことをうろ覚えしている。本書は我が家のどこかに眠っているはずだが、今回は探し出せなかった。ロングセラーだったので、古書店などで入手できるかと思われる。

手元にある本で、いちばん古いのが『自分で工夫する　山の自由研究』1975 年、朝日ソノラマ刊、である、本書は先生のお子さんたちが学校の課題で実際に自由研究として取り上げた記録に依拠したものである。

本書の第 5 章は、月山のお花畑と残雪、第 6 章は、月山の宗教登山と山の村、であり、第 5 章では月山姥ヶ岳の植生調査が、第 6 章では、岩根沢の宗教登山の村が主たる内容となっている。学校の自由研究とはいえ、五百沢先生が同行され、アドバイスをされているわけで、なかなか濃い内容に仕上がっている。ここで、特筆すべきは、五百沢先生が得意なスケッチが多用されていることである。例として、山形市をとりまく山の一部の画像を掲載したい。本書の最後のほうで、山のほんとうの高さを調べる研究、という項目がある。先生は全国の名山で、現地測量に依拠した調査を実行された。例えば、月山の標高は、かつて 1980 メートルとされていた。これは三角点の標高であり、神社が鎮座する最高点の標高が 1984 メートルであることを実証され、いまは地形図にも、